

公共空間を使いこなさないのは、もったいない。 SHIBUYAをロンドン、パリ、ニューヨークに並ぶ都市へ。

公共空間の活用、あり方を考える上で、渋谷区ほど格好の街はない。スクランブル交差点はまさにその象徴だ。サッカーのW杯出場が決まれば、人が集まり、ハロウィーンでも人が集まり、年越しのカウントダウンでも人が集まり。何かちょっとしたイベントが発生するたびに、渋谷のスクランブル交差点はあつという間に人でごった返す、日本で最も人気のある公共空間と言っていいだろう。もちろん、スクランブル交差点だけではない。現在進行中の区役所の建替えに、三井不動産と連携した宮下公園の再整備、東急電鉄とロフトワークが連携して手がける「Shibuya Hack Project」など、渋谷の公共空間のあり方は非常に興味深い。今回は、公共空間の責任者である渋谷区長の長谷部健氏にお話を伺った。（聞き手＝合同会社million dots代表 伊藤大貴）

*本インタビューは渋谷区議の鈴木けんぽう氏の依頼（業務委託契約）により実施したものです。

—スクランブル交差点は公共空間のあり方を考える上で、非常に参考になります。いろんなイベントが行われてます。確か去年の夏は盆踊りもやってました。出かけて行く側は楽しいんですけど、実際、当事者の自治体からすると結構、コストかかりますよね。安全もそうですし、ゴミの問題とか、交通への影響とか。

長谷部 ハロウィンとかカウントダウンとか、大体10万人くらいスクランブル交差点に集まってるんですよ。結構な数です。今、世界的にもナイトタイム・エコノミー（夜間経済）の重要性が叫ばれている中で、渋谷区にとってもハロウィンなど、こうしたイベントとどう付き合っていくかは非常に重要なと考えています。

個人的にはスクランブル交差点については有料制にしてもいいかなって思っています。イメージとしては5000円くらい。5000円の有料制にして、その結果、スクランブル交差点で遊ぶ人が3万

人に減ったとしても、1.5億円のお金が入ってきますから。今、ロンドンやパリはそういう方向に舵を取り始めています。

—スクランブル交差点に集まつてくる人たちの属性はどうなっているんですか？

長谷部 ほとんど渋谷区民はいなくて、カウントダウンだと7割は外国人です。だからロンドンやパリなどの世界の諸都市の動向を踏まえても、有料制にして大丈夫じゃないかなと思うんです。ナイトタイムエコノミーの視点から見ても、彼らはきっと喜んでお金を払ってくれるはずです。

—そこに渋谷区民がいないというのは、ニューヨークのタイムズスクエアに似ていますね。

長谷部 そうです。渋谷のスクランブル交差点は、あれそのものがメディアですから、ほんとにたくさん的人が集まつてくるわけです。ハロウィンの時などは周辺の百貨店のトイレなどは相当、汚れますし、現状、その清掃費などは商業施設サイドが負っているわけとして、この辺はもうちょっとなんとかしたいところです。

—仮に有料化するとして、ゾーニングとかどうするんですか？
可能なのでしょうか？

長谷部 できると思いますよ。みんなが歩きたい場所はまさに道路じゃないですか。普段、車が通行している場所、非日常のエリアですよね。渋谷の都市空間を眺めながら、道路を歩きたい。だから、歩道と道路を分離して境界を作れば、対応できると思います。ただ、イベントによって難しさが違いますね。

—ゾーニングで対応できないんですか？

長谷部 いや、そうじゃなくて、イベントが持つ性質の問題です。例えば、カウントダウン。あれは、12月31日の23時59分から1月1日の0時0分0秒までをみんなでカウントするイベントです。0時0分0秒になったら、必ず終わるイベントなんですよ。「おめでとう！」って言って。

ところが、ハロウィンはそうはいかない。なんとなく始まって、終わりもそれこそ終電までずっと続く。ハロウィンみたいなイベントは有料制といつても、ゾーニングして規制して、一定程度の秩序を作り出すのがやりにくいイベントですね。

ハロウィンの場合、ゾーニング以外でも、実はちょっと難しさもあって。仮装している人と仮装していない人の線引き、難しいですよね。それ、どうするんだろう？と。一々、判定するわけにもいかないですしね。

公共空間をみんなで使いこなすってすごく大事だし、面白いと思っているんですけど、イベントをやると、周辺商業施設への負担も大きく、有料化は一つの方向性だと思っています。実際にやろうとすると、ちょっといくつかハードルがある感じですね。

---ここまでのお話を伺っていて、これは渋谷特有の問題かもしませんが、渋谷における公共空間は誰のものなんでしょう？

長谷部 そう、それはまさにシビックプライドの問題です。私は「渋谷は誰のもの？」ということをいつも、考えています。私な

りの答えはあって、SHIBUYAのステークホルダーは渋谷区民だけじゃない。渋谷で働く人、働がある人、渋谷で学んでる人、学んだことがある人、渋谷で遊んだことがある人、遊んでる人。みんな、SHIBUYAのステークホルダー。SHIBUYAのステークホルダーは幅広いのが特徴です。

渋谷と何らかの関わりがある人にとって、心地よい渋谷を作りたい。そのために、公共空間をどう使いこなすかというの、とても大事なんです。

私は常々、「渋谷は成熟した国際都市を目指す」と言っています。僕が意識しているのはロンドンであり、パリであり、ニューヨークです。SHIBUYAはこの3つに並ぶ都市になるんだ、と。ステークホルダーが幅広いからこそ、また、そこに戻ってくる人たちがいる。その人たちのことをまで意識した都市空間を形成していくたい。

—非常にワクワクしますね。ビジョンを掲げた都市はこれからより目立ちますね。渋谷のステークホルダーはタックスペイヤーだけにとどまらないという考え方は視点として面白いですが、そもそも、なんでそんな発想になったのか興味があります。

長谷部 僕は渋谷区生まれ、渋谷区育ちなんですよ。だから原体験がある。例えばね、中学校の時、バレーボールをやっていたんです。で、結構強いチームだった。渋谷区立原宿中学校。「原宿」って聞くだけで、相手チームが異常に燃えるわけですよ。

—都内の、ど真ん中で育って奴らに負けらない。

長谷部 そう、そんな感情だと思います。でも原宿中はとても強かったから、都大会でも結構上位にいっちゃん。「原宿中」というハチマキをして試合に出るわけですけど、結構、そのハチマキがなくなるんですよ。別に僕がモテたわけじゃない。「原宿中」のハチマキが人気だったんですね。それくらい、みんなが憧れる名前だった。

みんなにとっての渋谷。みんなにとってのSHIBUYA。

—国土交通省は2017年6月に都市公園法を改正したわけですが、公共空間の有効活用は財政の視点にそれなりのウェイトを置いて議論されてきました。渋谷の場合は、こういう視点はあまり関係なさそうですね。

長谷部 伊藤さん、それは違うんです。渋谷区にとって財政の問題は大きい。渋谷区は財政的な理由から長期計画を立てにくいくんです。

—それはにわかには信じられません。

長谷部 実際、そうなんです。確かに外から見ると渋谷区はお金持ちが多い街に見えるかもしれません。マンション価格だって高いですしね。でも、実際には低所得層から高所得層まで幅広く、そして満遍なく分布しているのが渋谷区の特徴です。港区なんかだと、その辺は分布は偏ってます。だから、生活保護を含めてセーフティーネットの部分はそれなりに財政的に大きくのしかかってきます。

一方で、ご存知の通り、東京は特別区制度ですから、都と23区の間で財政調整を行いますが、制度的に渋谷区にとってはこの仕組みが結構、厳しい。固定資産税や法人市民税など本来、基礎自治体なら自ら徴収できる税金がありますよね。23区の場合、これが一旦、東京都へ吸い上がって、23区の財政状況に合わせて分配されるわけですが、渋谷区は不交付、つまり本来渋谷で上がった税収が渋谷区に戻らずに、他の特別区へ分配されています。

でも、よく考えてみてもください。その固定資産税なり、法人市民税なりがあがるための都市インフラへの投資は渋谷区がやらないといけないのです。けど、税の仕組み上、渋谷区が投資をして、渋谷区が回収できるようになっていないわけです。ましては渋谷区民の所得構成を見ると、意外に幅広くて、それなりに対応しないといけない。

—外から見る渋谷区のイメージと異なりますね。

長谷部 そうなんです。だから、なかなか長期的な視点で投資をしにくい。そうすると、次に考えるのが公共空間です。ここを民間企業とうまく連携することで、投資してもらって、回してもらうというの自然な考え方なんです。

—特定の企業が公共空間を使って収益を上げることに対する批判に対してはどう向き合いますか？例えば、宮下公園などは色々な議論があると思います。

長谷部 宮下公園はかつてはネーミングライツをやってナイキパークとして運営していました。前区長の時ですね。今は三井不

動産と公民連携のスキームで、空中公園として整備する計画です。色々批判はあると思いますが、僕はここが完成した時は、渋谷の一つのランドマークなると思っています。ニューヨークのハイラインに負けない、世界から人が集まる公園にしてほしいと、三井不動産には注文をつけています。先方のランドスケープ・アーキテクチャーも燃えてますよ。

さきほど財政の話をしましたが、宮下公園のケースは非常に区にとっては大きい。だってキャッシュポジションが確定したんですから。30年間の定期借地権を設定しての貸付ですから。渋谷区は三井不動産から30年に渡ったお金を頂きながら、都市公園としても整うわけです。

—一方でホームレス対策などで批判も出ている気がします。

長谷部 そこは全然知られていないのですが、私は宮下公園の再整備にあたって、このホームレス対策は何よりも力を入れているんです。北欧を中心にハウジングファーストという考え方があるんですけど、それをやっています。ハウジングファーストというのは、まず住む場所を確保する。一人の人間としてプライバシーがしっかりと確保された空間を整えることで、次に就労支援などに移行していくという考え方で、北欧を中心に政策効果が確認されています。こういう福祉対策はかなり手厚くやっていますが、なかなかメディアは報道してくれないですね。でも、ホームレスの当事者の人たちはよく分かってくれていますよ。

—東急電鉄などと連携している「Shibuya Hack Project」など渋谷区では公共空間を上手に使いこなす取り組みが多いように感じていますが、何か最近の事例で注目すべき案件はありますか？

長谷部 神泉町にオープンしたturn tableはご存知ですか？ここは東急電鉄が開発した宿泊施設なのですが、目の前に神泉児童遊園地という名前の区立公園があるのですけど、全然、活用されていなかつたんです。今回、turn tableを東急電鉄が開発するにあたって、この公園とセットで、つまりエリアを面で捉えて開発してくれたんです。まったく誰も注目をしていなかつた、寂しい公園がturn tableの開発によって変わろうとしています。今後に注目しています。

—そういう小さな公園でも、しかも渋谷区のように大都会であっても、小さな公園からエリアを変えるピンを打てるんですね。今、国ではBIDの本格導入も始まろうとしています。

長谷部 これから議会で予算審査が待っていますので、具体的なことは申し上げられませんが、BIDをやろうと思っています。それも神泉児童遊園地と同じような小さな公園です。加えて、同じように地域からは見捨てられかけている、そんな公園です。ここもBIDの導入によって大きく変わっていくと思います。

小さな公園ほど変化が大きいんですよ。僕の中では、この他にもいくつか公民連携をやってみたい公園があります。繰り返しますけど、今の財政制度の中で都市の魅力を高めるためには、公民連携しかないんです。その結果、エリアに活気が生まれて、住みやすくなるんです。区は財政の心配をすることなく、そういうまちづくりができる。誰も困りません。

大きな公園を使って大きく稼ぐということもあるでしょうけど、そういうホームランを出せる公園は数えるほどしかありません。でも小さな公園にも維持管理費は発生している。区の立場でいえば、そういう経費がなくなつて、かつエリアを再生できれば、それで十分なんです。そういうことができる公園はまだまだ、あります。

—長谷部さんにインタビューしていると、アイデアが湯水のごとく湧いてくる様子にちょっと驚きます。

長谷部 議員と区長では同じことをやろうとしても全然違いますよね。私も区議会議員の時代がありましたから、よく分かります。行政に提案しても、基本的にはなかなか通らない。できない理由ばかりが出てくる。でも、区長になると違うんです。行政のトップだから。「こんなことができそうです」というアイデアが現場からどんどん出てくる。もちろん、渋谷で生まれ育った僕だからこそ、出せる、出してきたアイデアもいっぱいありますけど。でも、僕個人の力じゃない。そこは行政の力なんです。

インタビューを終えて

非常に楽しいインタビューでした。このインタビューから割愛してしまったお話もたくさんあって。例えば、去年から渋谷区がはじめた「おとなりサンデー」。6月の第一日曜日、渋谷区のあらゆる公共空間を使って、道路でも公園でも、そこにテーブルを広げて、レジャーシートをひいて、歌ったり、踊ったり、ご飯食べたり、何をしてもいいですよ、っていう日を作ったそうです。僕はこの話を長谷部区長から聞いた時に鳥肌が立ちました。行政はお金を出すわけじゃないけど、みんながやってみたいなって思うことをストレスなくやれてしまう環境を、さらっと作っちゃった渋谷区。おとなりサンデーの取り組みは今後、対象の日時を増やすそうです。最後に、長谷部区長に、次の質問を投げかけました。「日本の中で、公共空間の使い方が面白いなと思う都市はありますか?」。長谷部区長は迷うことなく、「福岡市に注目している」。